４月２９日

開館50周年記念特別展関連講演会

「徳川美術館の刀剣コレクション」

Q&A

に寄せられたご質問に

講師・安藤香織氏(徳川美術館学芸員)

がお答えします

Q 展示の中に「表道具」という表記が何点か見受けられましたが、今回の元帳で言うと仁義礼智信の分類のどこに当たるのでしょうか？

A 「表道具」について

江戸時代の大名文化において「表」は「奥」と対になる概念です。表は儀礼と政治の空間を、奥は当主の執務及び生活の空間を示し、両者は屋敷内でも明快に区別されていました。「公（パブリック）」と「私（プライベート）」の概念と近いので、そう読み替えるとイメージしやすいかもしれません。表道具とは表で使用される道具、奥道具は奥で使用される道具のことを言います。

　さて、今回の出陳作品のうち、道具帳に「表道具」という文字が出てくるのは2点です。「刀　銘 兼定」（展示番号13）、「短刀　銘 兼常」（24）はいずれも、「御腰物元帳」（明治5年訂）の「義」部に、大正元年に19代義親の手元より下げられ表道具へ編入したと記載されています。つまり、上記の経緯により、大正元年に家の公式的な道具のうち「義」に組み入れられたことがわかります。

なお、江戸時代の「義」は贈答用の刀剣の分類でしたが、明治時代以降はかつてのような刀剣の贈答は基本的に行われません。そのため「御腰物元帳」（明治5年訂）では「拵（こしらえ）が全て附属している品」と内容が変更されています。